

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 江口 啓子

論 文 題 目

中世絵物語における画中詞の表現と機能

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	阿部泰郎
委員	名古屋大学教授	塩村 耕
委員	名古屋大学教授	伊藤大輔
委員	名古屋大学准教授	近本謙介

## 論文審査の結果の要旨

### 本論文の概要

本論文は序論および二部（第一部一～三章、第二部一～四章）七章と結論から成る。中世物語絵巻を主たる対象とし、それらを絵本も含めた「絵物語」として定義して、その大きな特徴である画中詞を中世絵物語テキストにおける重要な創造的要素であり、絵と詞という次元の異なるテキスト位相を媒介する「メディア」として絵物語諸作品における表現の諸相と機能の構造を探求し、文学作品としての中世絵物語がいかなる文化的創造を画中詞を介して成し遂げたかを解明しようとするものである。

序論では、画中詞を物語を形成する絵と詞に連なる「第三のメディア」として定義し、論文全体の概要を述べる。

第一部は、画中詞を総括的に論じる。第一章で画中詞に関する研究史を展望し、その独自のテキストの位相を「画中詞」として認知するに至る過程において、画中詞の本質が窺えるとする。第二章は画中詞を文学史的観点から論じる。画中詞成立の前段階としての絵の中の文字の書き入れから、『うつほ物語』の「絵解」の存在を指摘し、13世紀の画中詞入絵巻の典型として『華厳縁起』絵巻について検討し、画中詞の諸類型を3つに整理する。その中でも特に中心となる台詞型画中詞を、16世紀の絵物語における絵・詞・台詞型画中詞の三要素による作品を中心に検討し、その後画中詞は消滅するものの、近世絵入刊本における「書入」を、その近世的転生とする。第三章はメディアとしての画中詞の多様な機能を指摘し、とくに声の記録、またその主体となった女性の記憶メディアとしてとらえる視点を提出する。

第二部は、画中詞が大きな役割を果たす室町の絵物語の各論として、第一章は『新蔵人』絵巻、第二章は『児今参り』、第三章は『住吉物語』、第四章は『うたたね草子』をそれぞれ取り上げ、それらの画中詞の独自の表現と機能に注目する。『新蔵人』絵巻を最初から絵、詞と画中詞の三媒体が一体として創造された作品として、その画中詞が果たした独自のはたらきを指摘する。『児今参り』は画中詞を持つ彩色絵巻と白描小絵、そして画中詞のない奈良絵本の三様の伝本があり、三者の比較を通じて書物としての本の形態と画中詞の相関関係を明らかにする。『住吉物語』は多くの本文系統を持つが、そのうち画中詞を有する伝本において、その画中詞に『児今参り』からの影響があったことを指摘するとともに、画中詞の創作が物語の改作を生み出すことを明らかにする。『うたたね草子』は、絵巻として伝わる伝本にも画中詞の有無によって絵に違いがあることに注目し、画中詞が絵に与える影響について検証する。

以上、中世絵物語における画中詞の表現とその機能について総合的に分析し検証した。そこには中世文芸の知の集積を背景に、物語の創造と享受における主体としての絵物語制作、書写に携わった人々の創造的活動が画中詞に集約的に現象することを提示する。結論として画中詞研究の今後に残された課題を挙げたうえで、中世絵物語の画中詞というメディアの担い手として、特に白描小絵の伝承筆者（作者）として名を挙げられた室町後期の宮廷女房たちの連歌師の文芸活動と交わる知の連環と、画中詞から知られる作品相互の交流に注目し、画中詞の機能の文化的可能性を示唆する。

## 論文審査の結果の要旨

### 本論文の評価

文学と美術の融合したテキスト形式として、日本の絵巻が創成した文化的達成の一端が、画中詞である。本論文は、画中詞という絵（イメージ）と詞書（テキスト）の間にあって両者を媒介する“画の中の詞”を、絵巻における「第三のメディア」として位置付ける。画中詞が、中世の絵物語の世界を創造するにあたり、重要な役割を果たした中世絵巻の領域について、その表現と機能という視点から分析を試みた研究である。主たる対象とするのは、室町時代後期の王朝物語から派生した個性的な作品群であり、通常の彩色絵巻も含まれるが、中心を成すのは白描小絵という独特な形態の、主に宮廷女房による私的な空間で製作・享受された絵物語の領域である。その創造性を担う焦点として画中詞の意義に着目し、解釈と評価を試みたことは、本論文の独自な特色である。

第一部において、画中詞の研究史を美術史と文学史の双方から再検討を行う。なお多くの課題が、その初発的作例のうえでも残されているが、本論文は、初期の重要な作品である「華厳縁起」元暁絵の、既に全ての類型が見いだせる画中詞について、単なる絵解きに解消するのではなく、「物語の二重構造化」と呼ぶ、物語論的分析を提示するなど、刮目すべき指摘をいくつも提起している。この後、鎌倉末期から室町初期にかけて、多様な画中詞を有する絵物語が登場し、それらについて概観する。ただし、その中で詞書が無く画中詞のみを有する絵巻が少なからず見いだされるが、これらの作品について全く検討の対象とされないことは、いささか物足りない。

むしろ論者が最も力を注ぎ、大きな成果を挙げたのは、第二部の、一連の王朝物語絵巻における、画中詞を介した絵と詞とによる物語世界構築の解読である。初めから画中詞を構成要素として創られた『新蔵人物語』について、男装の女主人公の救済は、最後の画中詞により一挙に転倒され問いが投げかけられることを指摘した。また、絵巻化により詞には登場しない女房たちに多様な名と声を与えられた『児今参り』の画中詞による創造を的確に分析した。更に、『住吉物語』や『うたたね』が、画中詞によって源氏物語はじめ古典物語の知識を共有する知の交流を遂げており、それらが『児今参り』の画中詞を介して、相互に引用・想起される関係にあったことが明らかにされるなど、随所で卓見に満ちた指摘が提示される。特に、それら白描絵巻の制作に携わったとされる、後柏原院勾当内侍など伝承筆者とされる宮廷女房たちの果たした文化的役割に、作品分析を通じて改めて具体的に接近し得たことは、その画中詞に託された女房たち作者かつ享受者の主体的な声の記憶を甦らせるという問題提起と併せて、本論文の最も大きな功績と言ってよい。

但し、文学研究としての本文解読や、美術作品としての絵画の扱いへの配慮になお徹底を欠いていることは否めない。とりわけ、画中詞というテキスト論にとって格好の素材を扱うにもかかわらず、本論はこれをメディア論として扱うのみで、全くテキスト論的分析や解釈を試みようとしていない。むしろ、絵と詞の両位相のテキストの境界を媒介する間テキストとしての画中詞論が展開されるべきであったと望まれる。しかし、これらはいずれも今後の更なる研鑽に期待できるところである。全体として、“絵物語”という日本の傑出した文化遺産の達成を、画中詞という境界領域のテキストから解明を試みた可能性に満ちた研究として、審査委員一同一致して博士（文学）の学位にふさわしい論文と評価した。